

ディズニー映画『バイマックス』における医療的介入  
— カウンセリング場面などについての医学的検証 —

山口咲穂\*・古池雄治\*\*

（2019年8月30日受理）

Validation of Medical Interventions such as Counselling Skills  
in Disney Movie “Big Hero 6”

Saho YAMAGUCHI\* and Yuji KOIKE\*\*

（Accepted August 30, 2019）

はじめに

アニメーション（以下、アニメ）は、テレビアニメ以前から映画において制作されている。中でも、ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオ作品は幅広い年齢層をターゲットとして、子どもから大人まで世界中で多くの人々を魅了している。2016年4月1日時点での映画世界歴代興行収入は、10位以内の5作品がディズニー作品である。また、ディズニーキャラクターは子ども向けのおもちゃから衣料品、生活用品、化粧品にまで採用され、その人気ぶりと影響力は計り知れない。企業のブランドとキャラクターの関係について小谷崎ら（2010）は次のように述べている。

ブランドが、企業の技術力や商品の信頼性といった“体力”や“能力”の象徴であるのに対して、キャラクターは“魅力”の象徴である。“魅力”とは、短所や弱点も含めた総合力である。完全無欠な人物が必ずしも魅力的な人物とは限らず、逆に、弱さや抜けたところも併せもった人のほうが慕われたりする。こうした人間的な幅の広さのようなものが、企業や商品の“人格”にも求められるのである。人の心を和ませる「マヌケ感」や「親近感」といった人格は、キャラクターでしか体现できない。

このことから、ディズニーに関してはディズニーそのものがブランドであり、このディズニーブランドが、ディズニーのイメージ、商品価値、サービスの信頼性などの象徴となっている（小谷崎2010）。子どもにとってアニメなどの映像から受け取る情報量は膨大で、時として子どもの心身へ

---

\*桜川市立羽黒小学校（〒309-1453 桜川市友部201；Haguro Primary School, Sakuragawa 309-1453 Japan）.

\*\*茨城大学教育学部教育保健教室（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；Department of Health and Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.

重大な影響を及ぼすこともあり（古池 2004）、子どもを対象としたアニメでは情緒的な教育を取り入れることが重視される。子どもが視聴するアニメ映像は、主に保護者により選択されることが多くその基準はマスコミなどによる評判とブランドであろう。しかし、あらかじめその内容まで確認した上での選択であることは多くはないと思われる。

そこで本研究では、我が国でも公開されたウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオ制作のアニメ映画『ベイマックス（日本語版）』（原題名：Big Hero 6, ドン・ホール／クリス・ウィリアムズ監督、ウォルト・ディズニー・アニメーション・スタジオ制作、2014年）を取り上げ、ケアロボットであるベイマックスが主人公である14歳の少年に行うカウンセリング的場面を抽出し、その妥当性を検証することを目的とした。ベイマックスは医学的に適切なカウンセリングを行っているのかどうか、またカウンセリング行為によるその魅力を考察する。

## 方法と結果

ベイマックスはクライアントの健康を守ることを目的としたケアロボットで、映画の主人公ヒロの兄で工科大学に所属するタダシが苦心の末に開発したものであることから、その機能は医療的根拠に基づいているはずである。映画『ベイマックス』における人物の単純な移動や場面の切り替えおよび戦闘シーンを除く全てのシーンを逐語録に書き起こし、ベイマックスによるカウンセリングなどの医療的行為についての妥当性を検証した。適宜『ベイマックス（ディズニーアニメ小説版）』（アイリーン・トリンプル、しぶやまさこ翻訳 2014）により逐語録の確認を行った。カウンセリング技法は、主に『カウンセリング心理学—生き生きとした心を取り戻す』（松原ら 2009）を参考にした。この技法は、「精神分析的アプローチ」「来談者中心療法的アプローチ」「行動主義的アプローチ」「実存主義的アプローチ」および「特性因子理論に基づいたアプローチ」の5つの理論に分けられる。本研究ではカウンセラーをベイマックス、クライアントをヒロとし、カウンセラーが自身の価値観を持って自己実現する必要がある「実存主義的アプローチ」および心理査定法を用いる「特性因子理論に基づいたアプローチ」を除く前者3つの理論の検証を行った。健康相談的対応は、『養護教諭の健康相談ハンドブック』（森田 2014）を参考に相談的対応の検証を、カウンセラーの態度は、ロジャーズのカウンセラーに必要な3条件「自己一致」「無条件の肯定的配慮」および「共感的理解」（松原ら 2009）が行われているかを検証した。

### 1. 逐語録中の台詞の数

ヒロ：161回（ベイマックスの発言回数の1.7倍）

ベイマックス：96回（ヒロの発言回数の0.6倍）

### 2. カウンセリング技法の回数

精神分析的アプローチ：0回

来談者中心療法的アプローチ：単純な受容1回、感情の反映3回、非指示的リード1回

行動主義的アプローチ：モデリング1回

計6回（全台詞中6.3%）

### 3. 相談的対応

観察：8回

質問：14回

触診：1回

指示：0回

計23回（全台詞中24.0%）

### 4. カウンセリングと共に行うことで効果のあったと思われる行動

身体のプロtection：14回

ヒロによるベイマックスへの援助行動：6回

タッチング：5回

### 5. 医学的に不適切である対応：5回

なお、以下の考察では、論及箇所のDVD『ベイマックス（日本語版）』（2015年）による経過時間（total running time）を（時間：分：秒）で明示した。

## 考 察

1. ベイマックスによるヒロへの心理的な支援は成功したか—カウンセリングと死別体験の観点から  
 カウンセリングとは、カウンセリング心理学の科学に基づき、クライアントが尊重され、意志と感情が自由に豊かに交流する人間関係を基礎として、クライアントが人間的に成長し、自立した人間として充実した社会生活を営むことができるよう援助すると共に、生涯において遭遇する心理的、発達の、健康的、職業的、対人的、対組織的、対社会的問題の予防または解決を援助することである。すなわちクライアントの個性や生き方を尊重し、クライアントが自己資源を活用して、自己理解、環境理解、意思決定及び行動の自己コントロールなどの環境への適応と対処などの諸能力を向上させることを援助する専門的援助活動である（日本カウンセリング学会定義委員会2004）。ヒロは科学の才能を無駄にし、非合法のロボットファイトを行う日々を送っていた。兄タダシの不慮の死により、入学許可を得た希望の大学にも行かず部屋に引きこもっている（0:0:0～0:26:08）。しかし、ベイマックスとともに行動することで、兄の「たくさんの人を助けたい」という思いを受け継ぎ、仲間と協力しながら町を守るヒーローになる（1:17:54～1:31:38）。科学の才能という自己資源を活用し、仲間の才能を理解し、能力に合わせたヒーロースーツを作ることでその才能を助長し増強させた。兄の仇キャラハン教授の命を奪えば気持ちが落ち着くかと聞かれた際、「そうだ！いや、違う」、「関係ないだろ！」と自分の気持ちを整理できずにいた（1:12:17～1:12:53）が、その後「（すべきことは、キャラハン教授を倒すことではなく、悪だくみをやめさせることだ。）」と思なおし行動と気持ちが一致した状態になっている。ベイマックスと別れるシーンにおいても、5回別れが決断できずにいたが最後には自分で決断することができた（1:27:06～1:28:25）。以上より、カウンセリングの目指す援助活動に合致するヒロの変容があっ

たと考えられる。

喪失体験の観点からみると、坂口（2012）は死別後の適応を、

遺族が亡き人の死を受け容れるとともに、その死に伴って生じる役割や人間関係の変化などの事態にうまく対応し、故人のいない環境と調和ができた状態を意味するといえる。さらにいえば、適応の状態とは、たんに望ましくない問題が無い状態を指すのではなく、死別体験による成長や発達も包括した状態としてとらえられる。

としている。エンディングのヒロは、タダシの死を受け容れ、タダシの思いを引き継ぎ、研究室メンバー（Big Hero 6の構成要員）とともに街の平和を守るための活動するようになる（1:31:18～1:31:38）。故人のいない環境と調和ができた状態になっていることが分かる。死別を含む外傷体験後の成長の内容として次の5つが示されている。すなわち、①他者との関係の変化：人間関係の親密さが増す、②新たな人生の進路を見いだす：新たな関心が芽生えたり、新たな活動に取り組んだりする、③人間としての強さを得る苦しみの底を経験したが故のしなやかな強さを身につけ、力強く新たな人生を歩み始める、④宗教的な信念や生命観における変化：命の尊さや生きていることのすばらしさを感じる、⑤生き方やライフスタイルの変化：これまでの生き方を見つめ直し、人生において何が重要なのかということの優先順位を見直す（坂口 2012）。この成長内容をヒロに当てはめると、①として、研究室メンバーと関わり、多くの苦難をともに乗り越え親密さが増している。おばのキャスに対して自分から「もう一回」と言って抱きしめている（1:30:17）。②として、非合法のロボットファイトにあけくれる自堕落な生活を送っていたが、「兄さんみたいにならなきゃね」（1:15:00）と、新たな人生の進路を見だし街の平和を守るための活動を行っている。③として、クレイに報復しようとするキャラハン教授に対して「その人を離して。こんなことアビゲイルが望むと思う?」、「僕もおんなじ気持ちだった。だからもう…、やめて。」（1:17:48～1:23:38）と、キャラハン教授に対する復讐心を乗り越え報復を止める立場になっている。④として、復讐のため相手の命を奪うという信念から、キャラハン教授の行動を止めることに変化しており、命の尊さを感じている。⑤として、自堕落な生活を止め、街の平和を守るための活動を行うようになり生き方やライフスタイルが変化している。以上のように、ヒロには死別を含む外傷体験後の成長がすべてにおいて認められ、兄タダシとの死別体験へも適応していることから、バイマックスのヒロに対する心理的な支援は成功したと考えられる。

## 2. カウンセリングを生かした対応からみる

バイマックスが用いたカウンセリング技法は、「来談者中心療法的アプローチ」が主であった。感情の反映によりヒロが自分の内面世界を見つめる手助けをすること、受容と開かれた質問によりヒロの語りを促進した。ヒロがキャラハン教授の命を奪おうとするシーンでは、兄タダシの「たくさんの人を助ける」ことを目的とする行動を映像で見せる（1:12:58～1:14:37）ことで、模倣を促すモデリングを使用している。しかし、用いられたカウンセリング技法の回数は、バイマックスの台詞96回中6回6.3%と多くはない。ヒロの態度変容の要因には、バイマックスが用いたカウンセリング技法そのものの効果は限定的であったと考えられる。

相談的対応は、全台詞 96 回中 29 回 30.2% である。カウンセリング技法よりも相談的対応が多く、特に質問（14 回）および観察（8 回）が多く使用された。質問はクライアントに「あなたの話に関心がありますよ」というメッセージを伝え、相互作用を促すことに効果がある。質問 14 回中第 1 回目は自由な応答を期待する開かれた質問であり、非指示的リードに分類した。残りの 13 回は「はい」または「いいえ」で答えられる閉じられた質問であった。閉じられた質問は、質問する側は得たい情報だけを得ることができ、答える側は答えるのに苦労しなくてすむ。一般的にコミュニケーションを深める場合には、自由度が高く、内容に広がりが出るため開かれた質問を多く用いる方が良い。しかし、初対面で緊張度の高い場面などにおいて、最初から開かれた質問ばかり投げかけられると対話自体が苦痛になってしまう可能性もある。ベイマックスは自己紹介に引き続き最初の質問として、ヒロの「痛い」に対して開かれた質問を使用した（0:26:58）。これはカウンセラーとしてクライアントの状況を知るための妥当な質問である。その後は閉じられた質問を基本としており、ヒロとの会話を促進し相互作用を促している。しかし、ベイマックスの用いた閉じられた質問には適切でない使用方法がある（4. 医学的に不適切である対応参照）。観察については、ベイマックスはヒロの観察を行いその結果をヒロ自身に伝えている。これは健康情報の収集に加え、ヒロに対して「見守っている」、「身体の変化や危険な状況に対してすぐに対応する」ことを伝える意味合いが強いと考えられる。以上のことから、ヒロへの支援の成功要因は、カウンセリング技法の使用に加えて、カウンセリングを生かした対応を行っているからであると考えられる。

次に、カウンセリングと共に行うことで効果のあったと思われる行動には、身体の保護、ヒロによるベイマックスへの援助行動およびタッチングの 3 つがあった。

身体の保護は最も多く 14 回であった。身体を保護することは、安全を守ることである。安全 (safety) とは一般に「安らかで危険のないことおよび損傷したり危害を受けたりする恐れのないこと」、「看護では患者の生命をおびやかしたり、身体的・精神的に消耗する状況にしないことを意味する」ことである（岡田ら 2012）。安全の欲求は、「危険を避け、安心感を求めていくことで、自分の生命を安定的に維持したいという基本的な欲求」であり、生理的欲求に次ぐ優先度の高いものである。基本的な欲求が満たされることで、より高次の「所属と愛の欲求」「承認の欲求」「自己実現の欲求」が発現する。ボウルビィ（1993）は養育者が子どもに保護を与えることで不安感や恐怖感を軽減、もしくは取り除き、安全感をもたらすとし、

危急の際にすぐに快く助けに来てくれる親しい人の近くにいることは、私たちが何歳であっても良い保険に入っているようなものである。子どもが不幸な、あるいは脅かされるような状況に遭遇したときに、自分の親（または親に変わる人物）が、手の届くところにおいて、応答的で援助的であるだろうと確信している…（略）…この確信があると、子どもは外界の探索にたいして勇敢になれるのである。

と述べている。バージョンアップ後のベイマックスは、ヒロの危険に対し、すぐに快く助けに入っている（コンテナやがれきを受け止める、車から投げ出されるのを阻止する、浮き輪の代わりとなる、ヒロの「ベイマックス！」と呼ぶ声に応答する、ポータルに吸い込まれそうなヒロを助ける、ポータルから脱出させる [0:46:56 ~ 1:28:38]）。ベイマックスが応答的で援助的な行動を確実に

行うことによって、ヒロの安全欲求は満たされ、外界の探索に対して勇敢になり、マスクの男を捕まえるために次の行動を起こすことに繋がっている。

ヒロによるベイマックスへの具体的な援助行動は6回であった。基本的な行動にやや制限があるベイマックスに対して、ヒロは具体的な指示を出し、バージョンアップし、動きの遅いベイマックスを気遣いながら行動する（0：29：44～1：0：45）など、ヒロからベイマックスへの細やかな援助行動を認める。また、研究室のメンバーに対しても、ヒーローズーツを作成し、キャラハン教授との対峙では鼓舞し、マスクの男を捕まえるための案を出すなどの援助行動があった（0：54：36～1：20：11）。ヒロはベイマックスに守られているようにみえるが、実際にはヒロもベイマックス含む周囲の人間を守っていたのである。ベイマックスが意図的にヒロに働きかけたことではないが、ベイマックスやメンバーの不完全さが結果的にヒロを援助行動へと向かわせている。援助行動が援助者自身に与える影響は次の3つである。すなわち、①他者援助から役立ちを実感して認識や行動面で愛他的になる「愛他的精神の高揚」、②新たな人間関係から様々なことを吸収し活動そのものを楽しむことができる「人間関係の広がり」、③活動を通してやりがい生まれ、自分自身を高めようと奮起する「人生への意欲喚起」である（妹尾・高木 2003）。援助行動がヒロ自身に与えた影響として、当初は②「人間関係の広がり」である。最初の援助行動は襲いかかるマイクロロボットからベイマックスを引っ張って逃げるシーンである（0：33：50～0：34：59）。初めてベイマックスと対面した際には「(放っておいてほしい。)」と感じていたヒロだが、このシーンを契機としてベイマックスとの関わりを許容するようになる。ベイマックスをバージョンアップするための研究室のシーン（0：41：30～0：44：22）では、これまでの投げやりな態度とは違い、自分から積極的に考え行動している。研究室メンバーとマスクの男を捕まえることになる際には、「科学おたくの俺たちが、どうやって?」、「力になりたいって言ったけど、でもこんな…、あたし達じゃ。」と弱気なメンバーに対して、ヒロは「みんな、自分の力を、信じるんだよ。」と励ましている（0：54：10～0：54：21）。さらにヒロは、各自の得意分野を生かしたヒーローズーツを作成したが、これらの言動は①から③の全てが当てはまる。ヒロの周囲への援助行動は、タダシとの死別に適応するための大きな要因の一つであり、「爽快感」と「落ち着き」をも生み出す（清水 2009）。

第三番目のタッチングは5回あった。我が国における映画『ベイマックス』ポスターにあるように、ベイマックスはクライアントの健康を守るうえで、「抱きしめる」ことを重要な手法として用いている。看護ケアにおける抱きしめる行為はタッチングに分類される。タッチングとは、意図的な身体接触のことであり、癒し等を意図してやさしくふれあうことである。看護におけるタッチは、治療を目的とした指圧やマッサージなどの治療的タッチ、アセスメントを目的としたバイタルサインの測定やケアを目的とした清拭などの道具的タッチ、苦痛の軽減や励ましを目的として手や肩にそっと触れる共感的タッチの3つに分類される（土蔵 2001）。こうしたタッチングには、相手に対する親しさが生まれる親和作用があると同時に、相手が心を開いて話してみたいくなる気持ちを生み、心理的な浄化作用のきっかけを作る。ぬいぐるみには、さわったり抱いたりすることによって、気持ちを明るくしたり、心を癒やしたりする効果がある（井原ら 2006）。「心が落ち着いて穏やかな気持ちになる」、「いやされる」、「気持ちいい」といった慰めや安心感をもたらす効果には、ぬいぐるみの「やわらかさ」が重要である。『ベイマックス』映画パンフレットによると、ベイマックスは「白くて丸くて大きくて、空気の詰まったフワぶにボディ」で「思わず抱きしめたいくなる」

ように造形されている。「平気だから、ほんと…。」と押しのけようとするヒロに対して、ベイマックスが「思いやりやスキンシップが気持ちを落ち着かせるのに効果がある。」ことを意図して抱きしめることで、ヒロは「(大きくてふかふかな体に包まれ、気持ちが和む。思わずほほえむ。)」と感している(0:40:37~0:40:45)。さらに、医療従事者のユニフォームである“白衣”に代表される白は、信頼感や清潔感といったクリーンなイメージをクライアントに与え、高い好感度を持たせる効果がある。タッチングは、初対面のシーンからヒロがマスクの男を追うことを決め、落ち込んでいた状態から変化があるシーンまでの間(0:27:47~1:01:44)に3回、戦闘シーンなどの時間的経過がありヒロがポータルに吸い込まれそうになるピンチのシーンまで(1:01:44~01:21:10)は行われず、その後ヒロとベイマックスが別れるシーン(01:28:13)と両者が再会するシーン(01:31:29)の2回である。タッチングの回数は多くないが、ヒロの危機的状況や気持ちが高ぶった状況など重要な場面において行うことで、ヒロは辛い決断を自分でするなど思考の正の変化を生み出している。ベイマックスの形態的特徴を生かしたタッチングは、慰めと安心感をもたらす効果や心理的な浄化作用があったと考えられる。

### 3. カウンセラーの3条件からみる

「自己一致」については、ベイマックスはクライアントの「健康を守る」ことが自分の役割だと認識し、それを実行しようとしている。ケアデータカードが挿入されている限り「あなたの健康を守ります。」、「私はケアロボット、あなたを守ります。」、「わたしはどんな人の健康も守ります。」と宣言し(0:26:45~1:42:23)、クライアントの身体的な不調があると判断した際には即座に対処し、人を傷つける命令・要求は拒否し、虚偽の対応は行っていない。ベイマックスは自己一致を貫いていると考えられる。「無条件の肯定的配慮」については、人を傷つける要求をされた時以外、ベイマックスはヒロの考えや行動を否定・拒否することはなく、常に寄り添い、発言や行動を見守り従うことでヒロを受容している。ヒロに対し無条件の肯定的配慮を行っていると考えられる。「共感的理解」については、ベイマックスはヒロと会って間もない頃は身体症状へ対応するのみで、痛みの程度を客観的に評価することはあっても怪我に伴う心情を考慮せず“機械的”であった(0:26:50~0:29:00)。その後、「そう(マイクロロボットが行きたい場所を探す)すれば、気持ちが落ち着きますか?」、「マスクの男を捕まえたら、気持ちが治まりますか?」と質問し、ヒロの気持ちを確認するようになり(0:29:10~0:41:29)、「マスクの男を捕まえば、ヒロの気持ちは落ち着きます。」と認識している(0:52:34)。また、「嬉しかったり、盛り上がると」行う「グータッチ」を取り入れたり(0:44:14)、最初は疑問を持っていたヒロの要求も、後に受け入れ共有している(「空手をするケアロボットが本当に必要でしょうか?」[0:43:13]から「空手もできますよ。」[0:46:25]および「空を飛べるケアロボットが、本当に必要でしょうか?」[0:57:50]から「私は空飛ぶケアロボットです」[1:24:40])。人間であるクライアントは、ケアロボットに懐疑的である。ヒロのようにロボット工学を熟知していれば、なおさらであろう。ベイマックスは、クライアントに対する共感的理解について時間をかけて形成することで、“機械的”対応から徐々に“人間的”対応へと発展させてクライアントの信頼を得る手法としているようだ。

#### 4. 医学的に不適切である対応

医療的ないしはカウンセリング的対応として不適切であると考えられるシーンは5回あった。一回目は、「私の手は除細動器搭載です。…下がって。」のシーン（0：33：40）である。除細動器を使用する場合は、意識レベル、呼吸および脈拍の確認などバイタルサインの測定および心電図による適応の確認が必須（吉田 2015）だが、ベイマックスは行っていない。2回目は、「死んじゃったんだ…。」に対する、「タダシはとても健康でした。バランスの良い食事と運動で長生きできたはずです。」の発言（0：39：42）である。ベイマックスは生みの親であるタダシのすべてを理解し把握しているとはいえ、ヒロにとっては、理由や状況など思い出したくない事柄を何度も聞かされるのは辛いことである。遺族に対し個人的な関心のままに遺族の体験を詮索してはならない。3回目は、「これは治せないと思うよ。」に対する、「大切な人との別れに関するデータ取り込み中。ダウンロード完了。友達や親しい人と悲しみを分かち合いましょう。連絡を取ります。」、「メール送信完了。」の発言（0：40：04～0：40：22）である。グリーンケア（死別した人への支援）として、自分が抱えている問題を仲間をサポートを受けながら、自分で解決あるいは受容していくことを目的とした“セルフヘルプ・グループ”があり（坂口 2012）、体験を分かち合い互いに支え合うことができる。しかし、遺族には、個人的な体験を語ることに抵抗がある人も少なくない。話したくないのに、無理に体験を語らせてはいけない。感情があふれ出し、状態を悪化させてしまう危険性があるからである。クライアントの了解を得ず“セルフヘルプ・グループ”への参加を誘導することは望ましい行為ではない。4回目は、通りかかった研究室メンバーに「お願い！帰ってよ！」というヒロに「大切な人を失った悲しみを皆で一緒に乗り越えましょう。」との発言から、「わかった、でも…！」というヒロへ「誰からお気持ちを話しますか？」という発言まで（0：46：20～0：46：32）である。上記と同じく、話すことを望んでいない遺族に対して無理に語らせようとする行為は望ましくない。5回目は、キャラハン教授への復讐しか考えられなくなったヒロに対しての閉じられた質問と、タダシの“意志の社会化”を繰り返すシーン（1：12：20～1：13：05）である。質問は、クライアントからより多くを語ってもらうためであり、クライアントを責め立てるものではない。質問を用いる注意点として、多用しすぎないということがある。あまりに質問が多いと、クライアントに取り調べのような印象を与え、話した気がしないという気持ちにさせる可能性がある。死別においては、多くの遺族は亡き人の遺志を思い起こし、その遺志をなんらかの具体的な社会的な活動に繋げることによって、故人の生命を永続させようという心理機制すなわち“遺志の社会化”を認める（坂口 2012）。“遺志の社会化”は遺族にとって、故人の死を受け容れ、一歩を踏み出すきっかけになる。しかし、故人の死の意味を決めるのは遺族であり、“遺志の社会化”を第三者が良いものだと思えるものではない。ベイマックスはこの45秒間に、矢継ぎ早に閉じた質問を4回および「タダシは人を助けるために～」、「タダシはここにいます」等の“遺志の社会化”を3回勧めている。平均して6秒に1回ヒロにとって辛い言葉を投げかけていることになったのではないか。結果的にヒロへの支援は成功したものの、カウンセリングの観点からこれらの対応は危険であると考えられる。

#### 5. ケアロボットは実現可能なのか

これまで考察したように、ケアロボットであるベイマックスはやや不完全であるが、ヒロに対し



でのカウンセリング的効果は成功した。ベイマックスは、クライアントの状況に反応して起動し、初回は「こんにちは、わたしはベイマックス。あなたの健康を守ります。」と自己紹介しその目的を宣言する(0:26:18～0:26:57)。クライアントが応じることで契約が成立し機能を開始し、「ベイマックス、もう大丈夫だよ、と言われるまで離れられません。」(0:28:29)と終了方法についての説明を行っている。ヘルスケアとは、一般に健康の維持や増進のための行為や健康管理のことを指し、健康を守るという目的からベイマックスがヘルスケアを行うロボットであるとして矛盾しない。それではベイマックスが守る「健康」とは何であろうか。WHO憲章では、その前文の中で「健康」について次のように定義している(日本WHO協会)。すなわち、「Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity. (健康とは、単に病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることである)」。さらにこの「健康」の定義について、1998年に「Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.」とする新しい提案がなされた。これは採択されなかったものの、「健康」には静的に固定した状態ではないdynamicな面と人間の尊厳の確保や生活の質を考えるために必要で本質的なものだという観点からspiritualな意味合いがあることを示している。このような「健康」を第三者が介入し守るには相当の困難を伴うと思われる。また、たとえクライアントが「ベイマックス、もう大丈夫だよ。」と言い、スキャンによりクライアントが肉体的、精神的、社会的にすべてが満たされた状態にあることを確認したとしても、次の瞬間に「健康」に関するいかなる事態が発生するか予測は困難であり、動的(dynamic)である「健康」を守る任務を終了することはできない。したがって、クライアントに「健康」な死を迎えさせることによっても「離れられ」る(任務の終了)のではないか。ターミナル・ケアにおける「健康」な死とは、spiritual well-beingを全うした死との考えがある(佐藤 2004)ものの、ケアロボットに守られた「健康」のまま死を迎えるとはどのような状態なのであるか。残念ながら筆者らには想像できないが、病气、自殺、不慮の事故やいわゆる老衰による死ではないと思われる。これらのことから「健康」を守る完全なケアロボットは、未来においても実現できないのではないか。

### おわりに

映画『ベイマックス』において、主人公ヒロは人間的に成長し、自立した人間として充実した社会生活を営むことが可能となった。ベイマックスの用いたカウンセリング技法は比較的少ないものの、カウンセラーとしての「自己一致」、「無条件の肯定的配慮」、「共感的理解」の一貫した態度、身体の保護(安全の確保)、主人公による周囲への援助行動およびタッチングにより効果的な変容を促すことができたと考えられる。カウンセリング的行為は日常生活の様々な場面で使用され、カウンセラーもまたカウンセリング行為により人間的に成長する。これらのベイマックスによる医療的介入行為は、視聴した子どもたちに影響を与え、時にその行為を模倣し実践することで、その後の人間的な成長と生涯において遭遇する心理的、発達の、健康的、職業的、対人的、対組織的、対社会的問題の予防または解決に役立つ可能性が示唆される。しかし本研究において、(ヘルス)ケアロボットの存在は非現実的であることおよびベイマックスには医学的に不適切な対応があること

がわかった。いずれも医学的監修が不十分であったことが原因と考えられる。保護者は、ディズニーブランドであっても無批判に受け入れ子どもたちへ視聴させるには注意が必要であることを理解しておくべきであろう。

### 引用文献

- アイリーン・トリンプル. 2014. 『ベイマックス（ディズニーアニメ小説版）』（しづやまさこ翻訳，偕成社）.
- 井原成男・橋爪千恵子・日浅美由紀・森定美也子・吉野美緒. 2006. 『移行対象の臨床的展開—ぬいぐるみの発達心理学』（岩崎学術出版）.
- 岡田加奈子・遠藤伸子・池添志乃. 2012. 『養護教諭，看護師，保健師のための学校看護—学校教育と身体的支援を中心に—』（東山書房）.
- 古池雄治. 2004. 「子どもの健康とテレビの視聴」『So You』186（9），62-63.
- 小谷崎眞之介・五十嵐昇夫・石垣明日美・高妍・高田裕貴・中山淳一（2010）「ディズニーキャラクタービジネスの成功要因に関する考察—ビジネスのからくりと消費者心理—」[https://www.tama.ac.jp/guide/inter\\_seminar/img/2010\\_Disney.pdf](https://www.tama.ac.jp/guide/inter_seminar/img/2010_Disney.pdf)（2019年7月4日閲覧）.
- 坂口幸弘. 2012. 『死別の悲しみに向き合う—グリーフケアとは何か』（講談社）.
- 佐藤智. 2004. 「“健康な死” というものはあるか—Spiritual well-beingを全うするとき—」『順天医学』51，434-435.
- 清水祐. 2009. 「援助行動の否定的解消機能の検討」『Rikkyo Psychological Research』51，81 - 88.
- 妹尾香織・高木修. 2003. 「援助行動が援助者自身に与える影響—地域で活動するボランティアに見られる援助成果—」『社会心理学研究』18（2），106 - 118.
- 土蔵愛子. 2001. 「タッチ（Touch）に関する研究と実践の動向から見た今後の研究課題」『臨床看護研究の進歩』12，10 - 16.
- 日本カウンセリング学会定義委員会（2004）「カウンセリングの定義」『日本カウンセリング学会公式ホームページ』<http://www.jacs1967.jp/>（2019年7月4日閲覧）.
- 日本WHO協会「健康の定義について」『日本WHO協会ホームページ』<http://www.japan-who.or.jp/index.html>（2019年7月4日閲覧）.
- ボウルビイ. 1993. 『母と子のアタッチメント—心の安全基地』（二木武監訳，医歯薬出版）.
- 松原達也・松原由枝・宮崎圭子. 2009. 『カウンセリング心理学—生き生きとした心を取り戻す』（培風館）.
- 森田光子. 2014. 『養護教諭の健康相談ハンドブック』（東山書房）.
- 吉田素文. 2015. 『臨床病態学総論第2版』（ヌーベルヒロカワ）.